



阿部一族

1960. 11~12

上映映画解説

No. 68

阿部一族 13巻

東宝・前進座提携1938年作

原作……………森 鷗外
脚色・演出……………熊谷 久虎
脚 色……………安達 伸男
撮 影……………鈴木 博
音 楽……………深井 史郎

—配 役—

阿部弥一右衛門……………市川 笑五郎
長男 権兵衛……………橘 小三郎
次男 弥五兵衛……………中村翫右衛門
三男 一太夫……………市川 時三郎
四男 五太夫……………山崎 島二郎
五男 七之丞……………市川 扇 升
仲間 多助……………市川 延 司
柄本 又七郎……………河原崎長十郎
妻 登枝……………山崎 しづ江
女中 お咲……………堤 真佐子
光尚 ……………河原崎国太郎
大目付 林外記……………山崎 進 蔵
畑 十太夫……………中村 鶴 蔵

(1938年3月1日、日劇、東横、大東京で封切)

阿部一族

滋 野 辰 彦

「阿部一族」は森鷗外が大正2年に発表した歴史小説で、作者自身はのちにこれを殉死小説と呼んでいる。同年5月、戯曲に脚色されて明治座で上演、伊井蓉峰が阿部の二男弥五兵衛に扮した。熊谷久虎がこれを映画化したのは、25年後の昭和13年で、前進座が出演した。

寛永18年(1641)旧暦3月17日、肥後の城主細川忠利が熊本で病死した。その四十九日あけの5月7日にかけて、殿様のあとを追って18名の家臣が殉死した。阿部弥一右衛門は千両石の家臣で長らく殿のおそば近くにつかえた者であるから、家中の者は彼もまた当然殉死するとおもっていたのに、弥一右衛門は殿のお許

しがないため、そのまま新しい主人光尚につかえていた。これが阿部一族のいたましい悲劇をおこす原因となったのである。

殉死は殿のお許しがなければ、死んでも犬死とされる。なぜ忠利が弥一右衛門に死を許さなかったかといえば、それは長年のうちに主従のあいだで生じた感情にもとずくものであった。原作は人間の心理と性格を簡潔な文章で描写しているが、映画ではその間の事情が小説ほど明確でないのはやむをえない。

殉死した18名のうち、原作と同様に内藤長十郎と津崎五助の切腹が映画でも細かくえがかれている。17歳の長十郎は死を前にしてゆっくりと昼寝をする。邸内は静まりかえって、部屋の窓には吊りしのぶがさがっている。「その下には丈の高い石の頂を掘り穿めた手水鉢がある。その上に伏せてある捲物の柄杓に、やんまが一疋止まって、羽を山形に垂れて動かずにゐる。」と鷗外は美しい一節を挿入している。映画はもちろん、これらをうつすことを忘れたかった。鷗外の静かな文章のなかで、この短い一節はふしぎな情緒をつくり出しているが、熊谷の映画では、そのようにきわだった美しさが、このショットには乏しかったという印象が私には残っている。

殉死しなかったために仲間からあなどりをうけた阿部弥一右衛門は、子供たちを集めて瓢の酒をくみ、ろろうと謡をうたい、堂々と仕舞いをおどったあとで腹を切る。この場面は映画に創意の見える部分であり、沈痛な重くるしい空気がよく出ていた。弥一右衛門に瓢を持たせたのは、家中の口さがない者たちが、「阿部の腹の皮は人とは違うと見える。瓢箪に油でも塗って切ればよか」と噂したからである。台詞はすべて熊本弁である。

弥一右衛門は死んで殉死者のなかに加えられたのに、遺族に対する待遇では差別をうけた。長男権兵衛はそれをたえがたき処置とおもい、先君の一周忌にもどりを切って位牌に供えたが、これが主家への叛逆と目されて絞首刑になった。二男弥五兵衛(中村翫右衛門)以下、前髪たちの五男にいたるまで、のこった四人の息子は妻子と家来を集めて公然と討手を引きうけて戦死する決心をかためた。封建時代の武士の倫理観は、最初の殉死はもとより、つねに死ぬことが生き

ることよりも大事であった。それが熊谷の映画でも、重厚な演出のなかににじみ出ている。

阿部の屋敷は現在熊本市の中心になっている山崎町にあって、隣家には柄本又七郎(河原崎長十郎)が住んでいた。彼は弥五兵衛と年来の親友であり、阿部家が閉門を命ぜられると、夜ひそかに妻女(河原崎静江)を見舞にやるほど友情にあつい男であった。妻女が阿部家を訪れるところも、この映画のすぐれた場面である。

しかし討手が阿部の屋敷にふみいると同時に、柄本は単身で裏庭から台所へ走りこみ、親友弥五兵衛をみずからの槍でしとめる。これもまた当時の最も武士らしい友情の行為なのである。台所の土間の中央にある井戸をめぐる、大きく左右にゆれるつるべの綱をなかに槍に長じた二人が相対する場面は、いま思い出しても迫力に満ちていた。ちかごろ時代劇の殺陣師が変に過大評価されているようだが、この熊谷久虎や現在の内田吐夢など、時代劇専門の監督でない人が、今も昔も本当に立派な立ちまわりを演出している。

阿部一族の悲劇は、武士が彼等の個定した倫理観にとらわれ、それを破ることができなかったために起ったといえるであろう。鷗外の原作と熊谷の映画は、おなじ事件をえがいても、かならずしも同様の感銘をあたえるものではない。それは鷗外を古典的な、アポロン的な作家として見るとき、熊谷は浪漫的な、ディオニソス的な演出家だからである。しかし昭和13年には、熊谷久虎は未だその後におちいったファナティックな思想と感情におぼれてはいなかった。映画「阿部一族」には、熊谷特有のフォトジェニーが豊かにふくまれていた。見る人は今もなお、これを感じとるにちがいないだろうと思う。

なお「キネマ旬報」第638号(昭13・3・1)合の評論に友田純一郎氏の発言として

「熊谷に依ると、終ひに仲間多助と女中お咲が逃げて行くのださうだが、そこは検閲で切られたのださうだ」とあるのを参考までに付記する。

(11月6、9、13、16、20、23、27、30日、12月4日の9回)

国立近代美術館フィルム・ライブラリー